

柏木ビジョン

2025 .6. 16
新宿区立
柏木小学校
実践通信
第 3 号

国語 動作も入れて物語の世界へ 『スイミー』 S.N. 教諭

2年生では定番の物語、最近ではシャツや布などにプリントされたコラボ商品も多数ある、『スイミー』の物語の学習です。

「5!」「1!」「3!」「2!」

教科書の場面ごとの絵を教師が指して、子どもたちが第何場面か答えていきます。

よく覚えています。

「さあ、手でまぐろをつくってみましょう。まぐろは、どんなふうに泳ぐかな。泳がせてみてく たざい」

ものすごいスピードで泳いでいくまぐろを、子どもたちは表現しています。

前の時間で学習したことを、モニターに映し出しました。



めあて「三場面を読み、ようすを思いうかべよう」

3場面は、ひとりぼっちになったスイミーが、海の中のさまざまな生き物たちにめを奪われていくシーンです。それまであった、仲間たちを大きなマグロに食べられてしまい、ちりぢりになるような大変な目にあった後なのですが、あまりにも海の底の美しい展開に心奪われる展開が、第3場面では繰り広げられていくのです。S.N. 教諭は、そこに着眼させたくて、第3場面の最初が「けれど」で始まること、第二場面とつながっていることに意識させていました。

「どんな生き物に出会いましたか」(教)

いせえび、くらげ、うなぎ、こんぶやわかめ、いそぎんちゃく、と子どもたちが矢継ぎ早に答えていきます。すると

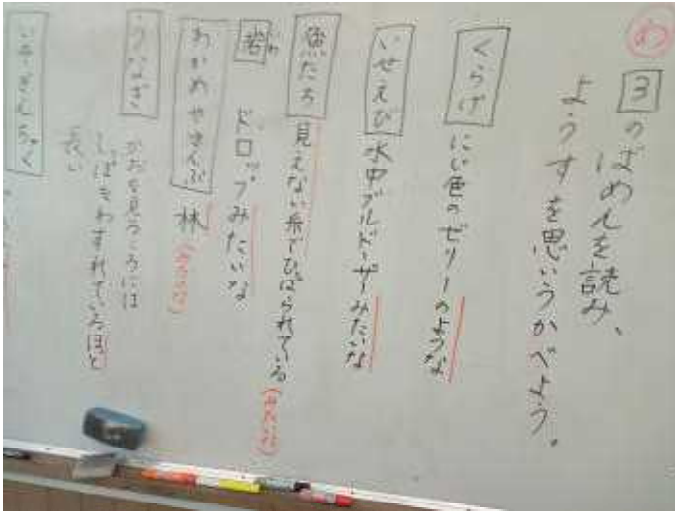
「いそぎんちゃくってなーに？」(教)

「二モが隠れているところ」(子)

子どもたちのすでに持ち合わせている知識というのは、実に千差万別で、ばらばらです。そんなことを知っているのと驚くこともある反面、そこから知らないのかと思うことも日常茶飯事なのです。でもつぶやいたり、問いを投げかけてくれることはとてもありがたく、「えーそんなことも知らないの!」と言われるのがいやで、声をつぐんでふりをされてしまうと、そうした事実と出会う機会を逸してしまいます。声をあげてくれた子だけでなく、たぶんクラスの中には、ある程度の確立で、そのことがわからない子もいるはずなのです。「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」ともいいます。ましてや低学年については、誰でも分かるであろうと思われることについても聞いてくれることを聞いてくれる子は、授業の陰のヒーローだったりもします。

S.N. 教諭は、すぐにイソギンチャクの画像をモニターで見せ、子どもたちの理解を得ていました。

どんな？



『スイミー』で登場する生き物たちは、様々な飾り言葉がついています。原作もちろんですが、この物語の訳を担当した方によるものも大きいと聞いています。近年この世を去ったものの、詩人としてとても著名であった谷川俊太郎氏が、訳にあたっています。

「くらげってどんなくらげ」(教)

「にじ色のゼリーのような」(子)

「みんな、にじ色ってあるけど、図工でもこの前勉強したよね」(教)

「日本は七色だけど、他の国は違う」(子)

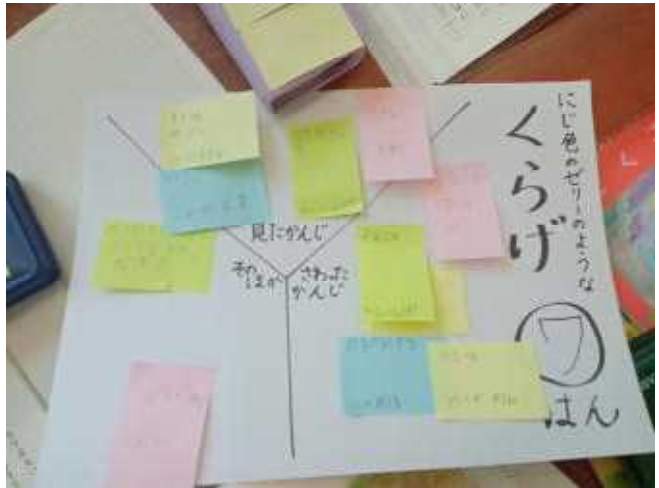
「みんなは虹ってみたことある」(教)

一斉に手が上がります。

「にじいろのゼリーのようなについて、班ごとに想像を広げてください」(教)

気付いたことを自分の色の付箋紙に書いて、あてはまる項目に貼っていきます。いずれの班も、付箋がたくさん貼られています。子どもたちは書き込んだシートをモニターのところら持って行き、スクリーンショットをとってもらい、班のシートとして保存されていきます。

このように、まずは気付いたことをどんどん出し合う経験も大切ですとS.N. 教諭は語っていました。



「いせえびは」(教)

「ブルドーザーみたいな」(子)

「水中ブルドーザーって、みんな知っている」(教)

知っている子、数人が手を上げます。はて、水中ブルドーザー…とっていると、S.N. 教諭が、映像を提示して見せていました。初めて見る工事機器でした。

「岩は」(教)

「ドロップみたいな」(子)

「先生、ドロップって何」(子)

すかさず、またモニターで写真をS.N. 教諭が提示します。

「知ってる」(子)

「ばあちゃんのところで食べた」(子)

「みんなの中には、『はたの墓』で知っているという人もいたよね」(教)

生活経験のない子どもたちには、発想をつなげることも大切なのです。

「では、次は魚たち、見えない糸で引っ張られたを表しましょう。みんな、みえない糸で引っ張られて」(教)

先生が、ひっぱるまねをすると、子どもたちが笑顔でうわーっと集まりました。

「じゃあ今度は後ろの〇〇先生のほうにみんな引っ張られて」(教)

子どもたちがいっせいにこちらめがけて押しよせてきます。

「ではみんな座ります」(教)

「次は、顔を見る頃にはしっぽを忘れていたウナギをあらわしてみしましょう」(教)

ひとりの子にスズランテープを渡すと、教室の端まで引っ張っていきました。

「ながーい」(子)



「もっと長いよ」(子)

「ぼくもやりたーい」(子)

とても盛り上がっています。

動作化もたっぷり行った後で、いよいよ授業の終盤です。

「最後に様子ができるように音読しましょう」(教)

授業冒頭の音読とは、見違えるようになっていました。すでに原文を暗記している子は、教科書も見ずに、情感たっぷりに、筋をなぞっていきます。この場面のイメージが、全員よくつかめたのだと思います。

授業後に、何人かの子たちに

「国語好きですか」と聞いてみました。

「いろいろなことができて楽しい」(子)

「うーん、算数のほうが好きかな」(子)

「お勉強は将来の夢に繋がる。国語もそれに繋がる」(子)

国語の物語の学習でもっとも大切なことは、「嫌いにさせず、興味をもたせること」と言われています。そのためには、最初は、保護者や教師の褒め言葉で十分なのですが、そのうちに、本人にとっての実感が伴わないと、いけなくなる時期がやってきます。みんなよりも、私は〇〇することがうまいとか、がんばって書いた〇〇を絶賛されたとか様々です。得意も苦手も創り出されるものであるとするならば、いっしょに得意をつくっていったあげたいものです。